

(2) 動態現象の比較靜學分析 (205—206 頁), (3) 靜態現象の動學分析 (207—213 頁) の例示を展開しているが、入門書にこれ以上の容易さを望むことは殆んど不可能である。特に蜘蛛の巣の理論の分析 (227—223 頁) は、動學理論の理解にとって極めて示唆的である。

最後の章は「封鎖經濟における均衡問題」について、幾つかのテーマを採上げて分析している。「利子の流動性理論」、「獨占的供給の均衡價格」、Launhardt-Hotelling の問題として知られた「異質的競争の均衡問題」、Cournot 對 Edgeworth の問題として周知の「双方獨占の均衡問題」、そして「労働及び土地市場の均衡問題」がそれに續いて分析されている。ところで、これらの幾つかの部分均衡分析のモデルは、Schneider によれば、「切離された他の變數が、部分關係の分析の間その値を變化しないという假定—*ceteris-paribus*-Klausel—」(290 頁) の下においてのみその妥當性を持つにすぎない。しかし、「部分均衡は切離された變數に依存しているのだから、部分均衡の存在はなお決して全國民經濟の總體均衡を保證するものではない」(291 頁)。ここに Schneider の Walrasian 體系に對する積極的評價 (293 頁) の意義が生れてくる。即ち第 2 部の最後の節の「封鎖流通經濟における總體均衡」がそれである。

微視分析と巨視分析の架橋をなすこの節における展開は、なお、靜態的假説の靜學分析であり、すべての當事者が *Mengenangepasser* たる同質的競争の前提に立っているという意味では、十分に満足的のものではない。しかしその手法は單なる Walrasian 體系の再生産に満足するものではなく、その本質點を限りない明確さをもって別決するのに成功しているように思われる。ただここで注目すべき一つの見解は一體系の自由度の數に關するものである。ここに自由度の數とは「任意に選擇し得る變數の數」(295 頁) をいう。即ち、定義式、反應方程式、均衡條件式及び技術方程式の全數が、尙變數の全數に及ばぬ時、全體系の一義的解を決定する爲に、餘分の變數に任意の數値を指定しなければならない。これは經濟の水準の決定にとって本質的重要性を持つものである。Schneider は「生産を伴う靜態流通經濟」の模型で、特に雇用水準の決定の自由度との關係に有意義な歸結を與えている (312—320 頁)。

IV

さて、この書は理論經濟學の入門書としてはやや高度の部類に屬すると思われるが、適度に用いられた數學や圖式 (140 圖) による分析は、入門者にはそれほどの負擔ではないであろう。しかも各章毎に附された參考文獻は、近代理論の主流を知るに有用な資料となる。しかし

吾々が最初に提供した問題——マイクロ分析とマクロ分析の總合——は、未だこの 2 卷の書によっては十分に答えられていない。即ち第 1 部は巨視的總量の事後的分析、第 2 部は微視的單位の事前的分析が主眼點であって、第 3 の微視的單位による巨視的總量の事前的分析は、依然として残されている。曰く、

「われわれにはなお、全體としての國民經濟に對する經過分析、即ち總經濟システムが一定の條件の下に、所與の初期状態からどのようにして時間の中に發展するか、を示す總體的經過分析という大きな課題が残されている」(322 頁)。

「それは純粹に貨幣的な經過が、生産と消費に關する經濟プロセスの經過に何如に作用するかということ、その一般的問題設定の枠内で研究しなければならない」(324 頁)。

「ここでは貨幣及び財政理論は、價格理論と同様に、總經濟過程の一般的な經過理論の、相互に結合して分離することのできない構成部分として現われるのである」(325 頁)。

われわれはこれらの残された問題への期待を第 3 部に托して、この書評を終らねばならない。

(荒 憲治郎)

ハリー・シュワルツ

『ソヴェート・ロシアの經濟』

Harry Schwartz, *Russia's Soviet Economy*.
Prentice-Hall, Inc., New York, 1950.
Pp. xxvi+592

本書の著者ハリー・シュワルツ Harry Schwartz は、シラキューズ大學の助教授である。戦争がおわった翌年 (1946 年) に書かれた論文¹⁾の中で、彼は、現在の世界狀勢の中では、アメリカこそもっともよくソヴェート經濟を研究しなければならないことを強調し²⁾、アメリカにおけるソ連經濟研究の戰略的意義を前面におしだしている。このような觀點から進められた彼の研究は、1946 年以後、かなりの分量に達している。いまここで論評しようとしているものをも含めて、それらを分類して一覽表にすれば次のものがある。

〔I〕 單行書:

(1) *Russia's Postwar Economy*. Syracuse, Syr-

1) Harry Schwartz, *Recent Activities of Soviet Economists*. *American Economic Review*, Sept. 1946, pp. 650—668.

2) Harry Schwartz, *op. cit.*, p. 658

acuse Univ. Press, 1947, 119 pages.

(2) *The Soviet Economy; A Selected Bibliography of Materials in English.* Syracuse, Syracuse Univ. Press, 1949, 93 pages.

(3) *Russia's Soviet Economy.* Prentice Hall, N. Y., 1950, 554 pages.

[I] 雑誌論文および學界展望:

(1) Recent Activities of Soviet Economists. *Amer. Econ. Rev.*, Sept. 1946, pp. 650—68.

(2) Prices in the Soviet War Economy. *Amer. Econ. Rev.* Dec. 1946. pp. 872—82.

(3) Official Criticism of Soviet Economic Institute, *Amer. Econ. Rev.* May 1947, pp. 190—91.

(5) Soviet Economic Reconversion, 1945—46. *Amer. Econ. Rev.* May 1947, pp. 611—23.

(5) On the Use of Soviet Statistics. *Journal of Amer. Statistical Association*, Sept. 1947, p. 401—06.

(6) A Critique of Appraisals of Russian Economic Statistics. *Rev. of Econ. and Statistics*, Feb. 1948, p. 38—41

(7) Soviet Postwar Industrial Production. *Journal of Pol. Econ.* Oct. 1948, pp. 438—41

(8) Soviet Labor Policy, 1945—49. *The Annals of the Amer. Academy of Political and Social Science*, (May 1949).

それらを通じてうかがわれることは、著者が戦後数年間の研究生生活を、まったくのソヴェート経済専門家として終始していることである。専門的なソヴェート経済研究者としては、彼は、アメリカにおける第一人者であるといっても過言ではない。たとえば、さきにあげたソヴェート経済文獻目録 *The Soviet Economy; A Selected Bibliography of Materials in English.* 1949. ひとつをとってみても、そのような断定は必ずしも言い過ぎではないと思う。

この文獻目録は、ソヴェート経済の専門家にとってきわめて便利なものであり、特に、英語文獻でソヴェート経済を研究しようとする人には必備のものといってもいい。この目録は網羅的でなく選擇的な目録であり(但し、単行本のみではなく雑誌論文、パンフレット類をも収録

3) 以上のほかに、ソ連邦出版の経済書の書評が数篇と、ニューヨーク・タイムズ *New York Times* 誌上への寄稿が 1948 年頃から今日にいたるまで数篇、散見される。

している)、分類は必ずしも書誌學的でなく、いま學界で問題となっている點に重點をおいた、いわば問題別の目録であって、それぞれに簡単な説明がついている。

この文獻目録をも含めて、また彼の勞作や彼の驅使している材料より考えても、彼がかなり自由にロシア語資料を驅使し、且つ、それらにある程度の「信頼性」“reliability”を認めていることが察知されたのである。ソ連邦外の經濟學者の間で屢々問題となるソヴェート統計の信頼度 reliability についても、彼はかなり肯定的な評價をくだしており⁴⁾、又、ここでいま私が問題としようとする彼の最近著の中でも同様の主張をのべている⁵⁾。

そういう點や、また、1947 年に出た著書 *Russia's Postwar Economy.* の中で、ソ連邦の軍事的經濟的力量は、近い將來において着實に増大し、ソ連圏とアメリカ圏との比較において前者が優越する日がくることもそんなに遠くはない、と主張して、ポール・バラン Paul Baran の鋭い反撃を浴びたこと⁶⁾などより推して、われわれ日本の研究者の眼には、少くともジャスニー Naum Jasny やクラーク Colin Clark とは別様の、ソヴェート経済専門家として映ってきた。その意味において、彼は、バイコフ Alexander Baykov やドップ Maurice Dobb によって代表されるイギリスのソ連研究とは一應一線を劃しつつ、尙かつ、餘りにも政治的な對ソ觀を介入させることなく、比較的冷靜な態度を持しつつある研究者であり、ある意味においては過去 30 年間のソ連の經濟建設の成果についてかなり肯定的な評價を與えてきた者の一人であると考えられてきたと思う。少くとも私はそう考えてきた。

だが、本書を讀んで、私はおどろいた。本書は朝鮮動亂以後に執筆されたものであって、朝鮮動亂によって對ソ敵愾心を昂揚したアメリカの雰囲気をもまざまざと行間に滲み出させている。本書はソ連經濟についての「事實」facts, ソ連邦の戦力の基礎をなす經濟力の正當な評價を與えるという目的を以て書かれたものであるが、全卷に脉々たる對ソ敵愾心を溢れさせたところの、きわめて調子の高い書物となっている。

いま、それを端的に示すものとして、本書の結論的部分をなしている第 15 章、「回顧と展望」“Retrospect and

4) そのことは別の機會にふれておいた。——拙稿「二つの體制と經濟統計の問題」『經濟研究』1950 年 1 月號 32—33 頁、参照。

5) *Russia's Soviet Economy.* pp. xv-xvi, 122—125.

6) Cf. *Amer. Econ. Rev.*, June 1948, なお、拙稿「アメリカのソ連研究」『一橋論叢』23 の 5 號, 470 頁、参照。

Prospect”をとり出し、その概略を紹介してみよう⁷⁾。
 ——著者は、第15章の冒頭において、それまでの敘述の結論として、建國以來30有餘年のソ連邦の達成を概括する。第1に、ソ連は、資本主義とは異なるところの經濟體制を創設した。それは「深刻な危機を通じてりっぱに生き残ったところの、統一あり生存能力ある社會主義國家であり經濟である……」「ソヴェートの經驗は東歐および共產主義支配のアジア全體の經濟的發展のために模範となった。」(531頁)第2に、ソ連邦は、私企業制のもっている獎勵や懲罰の制度に代わる、勞働への獎勵誘引をつくり出し、それを成功裡に利用している。しかし、「人は『新しいソヴェート的人間』というソヴェートの全主張を信ずる必要はない……」「青年達は……理想と集産主義の夢に感激していた。」宣傳隊が、「政府の利益に奉仕する市民は、同時に自己自身の利益に奉仕するものである、という考えを叩きこんでいる。」(532頁)

これらの達成をのべたてた後で、著者は第3の、だかもっとも重要な、達成に移る。——第3に、ソ連邦は、生産の偉大なる増大と技術革命=勞働生産性の向上とを達成した。「1950年のソ連邦は、近代戰の神經を供給したところの工業生産の増大の故に、世界における第2の最強國である。」そして、ソ連邦の「技術家達の中の最も有能な連中は世界の最良の技術家にひけをとらない。核分裂についてのソヴェートの成功はこの間における巨大な進歩を立證している。」(533頁)かかる生産量の増大と勞働生産性の進歩を認めたあとで、著者は、それについて、重工業と輕工業との「30年のギャップ」(538頁)、したがってまた、ソ連民衆のおどろくべき低い生活水準を主張する。そして重工業におけるかかる巨大な達成は生活水準の低位と軍隊のそれにも比すべき強制勞働

7) その前に本書の内容の大體を示すために、内容目次を示しておいた方が便利であろう。それは次の如くである。——第1章 資源的基礎、第2章 歴史的背景、第3章 思想的背景、第4章 ソヴェートの經濟的發展、第5章 國民經濟計畫、第6章 ソヴェート工業の組織と機能、第7章 工業生産の發展、第8章 農業の組織、第9章 農業生産の發展、第10章 運輸および通信、第11章 商業・住宅および福利施設、第12章 ソヴェートの財政制度、第13章 雇傭勞働および囚人勞働、第14章 對外經濟關係、第15章 回顧と展望、附録 第5次5ヵ年計畫の實績、索引、以上である。

(536頁)によるものと斷定し、第二次大戰におけるソ連邦戦力の昂揚については特に、American Lend-LeaseとBritish Mutual Aidとを強調することを忘れない。(539頁)。このように議論しつつ事の序でに著者はドップ Dobb のソ連辯護論 *apologia* を批判した後で、著者自身のソヴェート經濟に対する總括的見解を與える。私はそれをここに原文のまま引用しよう——“If we break away from Marxist shibboleths, it seems not unfair to characterize the Soviet economy in these terms: From the point of organization and objectives it is a military feudal economy based upon industry rather than agriculture and employing twentieth century technology for military, productive, and propaganda tasks. In the last analysis, its internal stability and freedom from overt discontent are guaranteed by the repressive forces of the state and the draconian measures they employ.” (542頁)

以上の基本的觀照のあとで、ソ連邦對アメリカ合衆國の戦力の綜合的比較と1960—65年のソ連經濟の發展豫想とソ連諸企業の戰略的配置とが與えられ、最後にソ連的共產主義の長期的展望が示されている。——以上が、本書の結論部分をなす第15章の主要點である。

よきにせよあしきにせよ、いまのアメリカの第一線のソ連經濟専門家が、このような結論をくだしているということは、注意すべきである。アメリカのソ連研究は、はっきりと一つの方向に向って進んでいる。Hubbard流のソ連統計における *double book-keeping* の主張や *cooked figures* の主張によって、ソ連經濟力の低さを説明したり、Clark流に独自の數字を作成してソ連經濟力の評價における過大評價 *upward bias* を指摘したりする態度⁸⁾とは異なり、ソ連の經濟力の偉大さを認めつつ、それを新しく解釋し直し、對ソ戰略に役立てて行こうとする方向がそれである。よきにせよ、あしきにせよ、今後のアメリカにおけるソ連經濟研究家の方向がこの書物の中ではっきりと示されているのである。

8) Colin Clark, *The Conditions of Economic Progress*. Second and Revised Ed., 1950. pp. 163—192.

(野々村一雄)